

1. 研究の目的と方法

現在の日本では長期間にわたり続いてきた村落を中心とした地縁社会が高齢化や過疎化、労働環境の変化などにより崩壊しつつあると言われている。一方でNPO（非営利民間組織）のように環境、福祉、教育など特定の分野に関心のある人たちから成る集合体が都市において現代的なコミュニティとして注目されており、陣内はこのようなコミュニティを「テーマ型コミュニティ」と呼んでいる（陣内 他、2007）。

ところで、ここ弘前市においてもテーマ型コミュニティと考えられる事例がある。それは、弘前市で活動する<岩木遠足>実行委員会である。岩木遠足実行委員会は、2009年から2011年に3回にわたって開催されてきたイベント、岩木遠足の企画・運営を行う有志ボランティアの集団で、年齢も職業も異なる人たちが集まっている。弘前市出身の画家、奈良美智の展覧会「YOSHITOMO NARA +graf1 AtoZ」²（以下AtoZ）で企画・運営あるいはボランティアに携わっていた者が多いが参加の契機は様々のものである。このコミュニティを考えると従来からの地縁型コミュニティでは捉えられない。そこで、本研究では岩木遠足実行委員会をテーマ型コミュニティとして捉え、地縁でも血縁でもない、異質な人たちから成る岩木遠足実行委員会というコミュニティがどのように形成されたのかを明らかにしたい。

最後に本論文の調査方法を簡単に説明したい。本研究では岩木遠足実行委員会のメンバー26名と当日直前の準備や当日に参加していたボランティア9名を対象に参与観察、聞き取り調査を行い、並行してコミュニティに関する文献調査を行った。参与観察では筆者自らも4月から岩木遠足実行委員会のメンバーとなり、実行委員会ミーティング³と生活の時間ミーティング⁴でミーティングの場の参与観察を、岩木遠足当日には岩木遠足の様子の参与観察を行った。また、実行委員会ミーティングには4月から11月にかけて計8回、生活の時間は7月から8月にかけて計2回参加しており、聞き取り調査では岩木遠足実行委員会メンバーの3名から協力を得ることができた。また、2011年11月28日（月）の岩木遠足実行委員会ミーティングに来ていた16名には質問紙調査にも協力していただいた。

1 「暮らしのための構造」を考えてものづくりをするクリエイティブユニット。奈良美智展では会場にも展示の一環ともなる小屋づくりをボランティアスタッフと共に行っている（幸村、2009）。

2 「YOSHITOMO NARA +graf AtoZ」とは、弘前市吉野町にある吉井酒造煉瓦倉庫で3回にわたって行われた奈良美智の最後の展覧会。ボランティア参加者は800人を越え、来場者は8万人という3回の展覧会のなかで最大の展覧会となった（幸村、2009）。

3 基本的に月に1度行われていた

4 適宜開催されていた

2. 岩木遠足と岩木遠足実行委員会の概要

岩木遠足とは、有志ボランティアである岩木遠足実行委員会が企画運営する非営利事業で、生活や音楽を巡るトークやワークショップ、バザールやライブなどでつくられたイベントのことである。2009年に初めて開催され、今年は3回目となる岩木遠足2011が9月24日(土)・25日(日)の2日間にわたって開催された。岩木遠足の開催内容は毎年少しずつ変化してきている。ここでは岩木遠足2011の内容を簡単に紹介する。

表1 岩木遠足2011の時間割

1日目 9月24日(土)				
時間	時間割 ※()内は定員	内容	場所	
9:00～17:00	生活の時間	おむすびコース(40名)	①佐藤初女さんのおはなし「出会いが未来をひらく」とおむすびづくり ②ごぎん刺しのくるみボタンづくり	①森のイスキア ②弘前ごぎん研究所 ③津軽こけし館 ④福土助産所
		こけしコース(40名)	③こけしの絵付け体験	
		マタギコース(40名)	④助産師・福土レイ子さんのおはなし「いのち」と関わる仕事 ⑤マタギ・工藤光治さんのおはなし「マタギの暮らし・山と生きること」 ⑥マタギと山歩き	
17:30～	コースレポート	生活の時間で、それぞれのコースで体験したことを各コースのバスガイドがレポート	吉井酒造煉瓦倉庫	
18:30～	音楽の時間	ytamo、オオルタイチ、原田郁子+トンチ+カメイナホコのスペシャルバンドによるライブ		
※17:00～21:00	岩木遠足バザール	フードや津軽のちょっとしたお土産の販売		
2日目 9月25日(日)				
時間	時間割	内容 ※()内は定員	場所	
10:00～	学びの時間	レクチャー「くるみの木の下で」/石村由起子 (20名)	カフェA	
		レクチャー「教会を旅して」/KIKI (45名)	スペースデネガ	
		ワークショップ「聴くと、話すと」/西村佳哲 (24名)	吉井酒造煉瓦倉庫	
		ワークショップ「もう一つの遠足」/19さん (45名)		
13:30～14:30	まとめの時間	トークセッション「僕らの生活の中の岩木遠足」	吉井酒造煉瓦倉庫	
※11:30～15:30	岩木遠足バザール	食べ物や津軽のちょっとしたお土産の販売		

出典:「岩木遠足 2011年9月24日(土)25日(日)」パンフレット、「第8回 岩木遠足2011実行委員会」を基に筆者作成

表1にあるように、岩木遠足は各日2つの「時間」と飲食物や雑貨類が買えるバザールなどで構成されている。来訪地はいずれも津軽近辺で、参加者はこれらの時間を1日目は主に貸切のバスを利用して、2日目は徒歩で巡る。

また、岩木遠足2011では各コースのお客さんは約40人であり、お客さんの居住地も北は北海道地方から南は九州地方まで幅広い。このことから、集客力がある規模の大きいイベントであることがうかがえる。

岩木遠足2011を主催する岩木遠足実行委員会のメンバーは、2011年10月現在で筆者を含め28名、内男性15名女性13名である。年齢は20～30代が多いものの40代、50代の人たちもおり、幅広い年代の人が成員となっている。また、職種についても写真屋・病院事務・保育士・学生など異なる職種の人たちが集まっている。

また、当日のみまたは当日と直前の準備のみ参加者(うち話を聞くことができた人)は9名、うち男性3名女性6名である。年齢は20代が7名、30代が2名と若い人たちが構成されている。職種は学生が4名と構成員の半数近くを占めるが、病院の事務職や衣類・雑貨小売の自営業者もおり、実行委員会と同様に異なる職種の人たちが集まっている。

3. 外に開かれているように入りづらいコミュニティ

石塚によると都市では地域横断的で目的追求型の非営利の住民団体が組織されてきた

(石原 他、2010)。また、陣内はNPOのように環境、福祉、教育など特定の分野に関心のある人たちの集合体を「テーマ型コミュニティ」と述べている(陣内 他、2007)。また、岩木遠足実行委員会がこのような特徴を持つテーマ型コミュニティとして考えられることもと述べた。以下ではどうしてそのように言えるのかを説明したい。

1) 地域の垣根を越えたコミュニティ

テーマ型コミュニティが持つ特徴の1つとしては、石塚が述べるように「地域横断的」であることが挙げられる。そこで、岩木遠足実行委員会のメンバーの居住地に着目してみる。

実行委員会のメンバーの7割⁵にあたる14人が弘前市の在住者である。しかし、平川市や青森市、黒石市から参加している青森県内の弘前市外在住のメンバーや、少数ながらも県外在住者も6人おり、これは実行委員会のメンバーの3割⁶にあたる。

付け加えて、青森県内で弘前市外在住のメンバー4人(筆者含む)は岩木遠足への参加回数が1回または2回である。つまり、岩木遠足2年目以降に青森県内で弘前市外のメンバーが参加するようになったのである。これらから、岩木遠足実行委員会というコミュニティは地域の垣根を超えるという点においては徐々に外に開かれてきている。よって、岩木遠足実行委員会は石原らが言うような地域横断的という特徴を持つコミュニティであると言える。

2) アートに関心のある人たちから成るコミュニティ

テーマ型コミュニティのもう1つの特徴は、陣内が言うように「特定の分野に関心のある人たちの集合体」ということである。そこで、ここではメンバー間のつながりとボランティアらの参加のきっかけに注目する。

1つ目に、ボランティアらにはAtoZを始めとする「イベント関係のつながり」・「血縁関係」・「harappaのつながり」・「実行委員会のメンバーとのつながり」の4つのつながりがある。実行委員会のメンバーは、その中でも「イベント関係のつながり」と「harappaのつながり」を持つ人がかなり多い。また、岩木遠足当日のみ参加のボランティアにおいても何のつながりもなく参加している人はいない。

2つ目に、ボランティアらの参加のきっかけをしてみる。岩木遠足実行委員会の参加者の多くはAtoZでのボランティアの経験者であり、参加のきっかけについても「AtoZの流れでそのまま参加している人」と実行委員会の誰かに「誘われて参加した人」が大部分を占めている。そして、岩木遠足当日のみ参加したボランティアの大半も、岩木遠足実行委員会の誰かに誘われたことが岩木遠足のボランティアに参加するきっかけになっていた。

⁵ ただし、この数値は在住地を聞き取れた人だけで算出している。

⁶ 同上。

以上のことから、岩木遠足実行委員会というコミュニティは、徐々に弘前市外在住者が増えてきているという意味では外に開けているように思われる。しかし、その間口は誰にでも開かれているわけではなく、アートという特定の分野に関心があってAtoZに参加していた人や実行委員会のメンバーや harappa など何かしらとのつながりがある人でないと入りづらいコミュニティであると考えられる。それでは、そのような閉鎖的なコミュニティが毎年メンバー数を増やしながらかつて存続しているのはなぜだろうか。

4. 外部と実行委員会をつなぐ弱い紐帯

マーク・S・グラノヴェッター（1973）は紐帯の強さを、ともに過ごす時間量、情緒的な強度、親密さ（秘密を打ち明けあうこと）、助け合いの程度、という4次元を組み合わせたものと定義している。グラノヴェッターは著書「弱い紐帯の強さ」の中で弱い紐帯の働きに注目しているが、岩木遠足実行委員会というコミュニティにおいてもこの弱い紐帯が機能していると考えられる。ここで注目したいのは、人手が足りなくなったときに外部から人員を連れてくる人々の存在である。

たとえば、図1に示したように弘大ラジオサークルの32さん・33さん・34さんは、一緒にラジオをやっていた岩木遠足実行委員会のメンバーの25さんに誘われて、岩木遠足当日のみ参加のボランティアとして岩木遠足に参加していた。このことから、弘大ラジオサークルというコミュニティと岩木遠足実行委員会というコミュニティの間には25さんを介して弱い紐帯が存在することになる。ただし、この弱い紐帯は常に機能しているわけではなく、今回25さんが声をかけ32さん・33さん・34さんがボランティアとして岩木遠足に参加したことで弱い紐帯が機能したのである。このことから、25さんは岩木遠足実行委員会と他のコミュニティの間の弱い紐帯を機能させる意味で重要な役割を果たしていると言える。

また、25さん以外にも実行委員会のメンバーであり自営業を営む3人も、お店のお客さんと岩木遠足実行委員会をつなぐ、弱い紐帯を機能させる役割を果たしていた。このように、岩木遠足実行委員会には人手が足りなくなった時に外部と実行委員会との間の弱い紐帯を機能させる人々がいる。そのことが岩木遠足実行委員会の維持を可能にしている一因と言えるのではないだろうか。

5. おわりに

本研究では岩木遠足実行委員会をテーマ型コミュニティとして捉え、地縁でも血縁でもない、異質な人たちから成る岩木遠足実行委員会というコミュニティがどのように形成されているのかを明らかにすることを目的としていた。ここで簡単ながら結論を述べると、岩木遠足実行委員会というコミュニティは岩木遠足実行委員会のメンバーやAtoZを始めとするイベント、harappaなど、何かしらとのつながりがある人を主な成員とし、弱い紐帯の働きなどによって徐々にメンバーを増やしながらかつて形成されたコミュニティなのである。

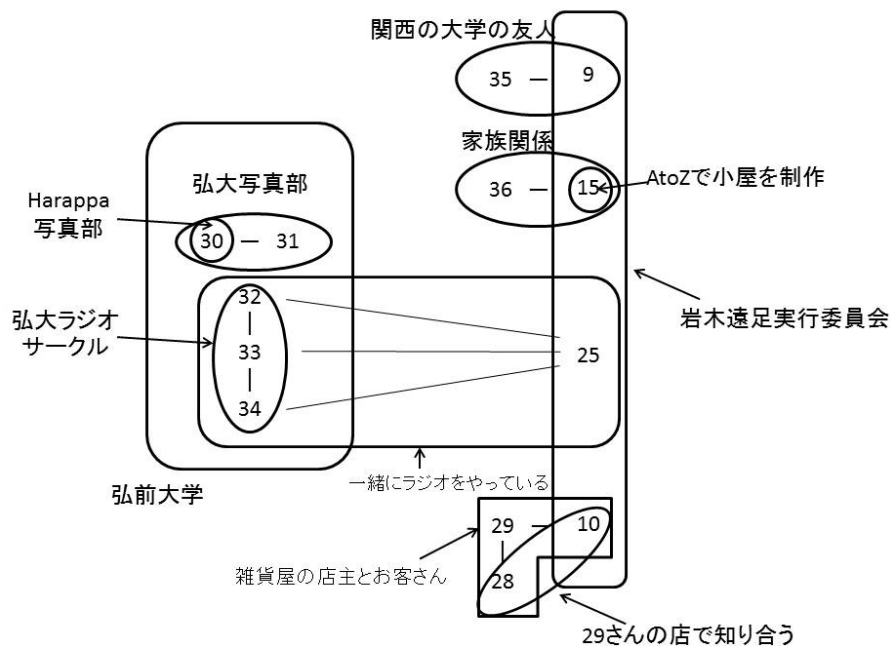


図 1 岩木遠足当日のみ参加していたボランティアのつながり

出典：聞き取りと下記の参考文献を基に筆者作成
 参考文献：脇 他 (2006)

参考・引用文献、資料、URL一覧（要約部分のみ）

石原武政 他 (2010) 『まちづくりを学ぶ——地域再生の見取り図』 有斐閣

経済企画庁 (2000) 『国民生活白書（平成 12 年版）』 大蔵省印刷局

幸村智美 (2009) 『アート NPO・harappa の魅力』 弘前大学人文学部社会行動コース平成 20 年度卒業論文

陣内雄次 他 (2007) 『コミュニティ・カフェと市民育ち——あなたにもできる地域の縁側づくり』 萌文社

鈴木敏正 他 (2010) 『住民自治へのコミュニティネットワーク——酪農と自然公園のまち標茶町の地域再生学習』（叢書 地域をつくる学び XV）北樹出版

マーク・S・グラノヴェッター（大岡栄美訳）(1973=2006) 「弱い紐帯の強さ」『リーディングスネットワーク論』 勁草書房

脇裕子 他 (2006) 『AtoZ 奈良美智+グラフ』 フォイル

2011、「岩木遠足 2011 年 9 月 24 日（土）25 日（日）」パンフレット

2011、「第 8 回 岩木遠足 2011 実行委員会」